

表① 歯科医師国家試験の受験者数と合格者数、合格率の推移

回数	合格			現役者のみ		
	受験者数(人)	合格者数(人)	合格率(%)	受験者数(人)	合格者数(人)	合格率(%)
第102回	3,531	2,383	67.5	2,516	1,915	76.1
第103回	3,465	2,408	69.4	2,355	1,921	81.6
第104回	3,378	2,400	71	2,356	1,928	81.8
第105回	3,326	2,364	71	2,311	1,882	81.4
第106回	3,321	2,366	71.2	2,373	1,907	80.4
第107回	3,200	2,025	63.2	2,241	1,642	73.3
第108回	3,138	2,003	63.8	1,995	1,457	73.0
第109回	3,103	1,973	63.6	1,969	1,436	72.9

術式を問う問題を前述の新形式問題と組み合わせる問題も出題されている。

◎合格基準の増加

かつては、歯科医師国家試験は「一定の基準点以上を満たせば合格」という絶対評価方式であった。しかしながら、現在の国家試験は出題基準で定める内容が近接した領域を設け、それぞれに基準点を打ち立てる相対評価方式となっている。つまり、毎年基準点が変わるのである（以下、領域別得点率とする）。

第95回歯科医師国家試験より導入された必修問題も第99回より50問、第103回より70問となり、問題そのものも上記の内容を受け、難化傾向にある。

なお、必修問題は「8割以上の正答率を満たすこと」という絶対評価となる。さらに、平成26年度版歯科医師国家試験基準で必要最低点という新たな合格基準が設けられた。

これらの合格基準をすべて満たし、なおかつ禁忌肢選択が規定の問題数以下ではじめて歯科医師国家試験に合格となる。

問題の難化に加え、合格基準が増加したにもかかわらず、1つでも合格基準を満たせないと即不合格となること、実際の合格率も大幅に低下していることから、「歯科医師国家試験は難化している」という事実は認めざるを得ないであろう（表1）。

るを得ないであろう（表1）。

歯科医師国家試験合格率の低下を受け、大学側においても、進級・卒業の難化傾向が著しい。定期試験や卒業試験の合格点の引き上げや回数の増加、卒業基準の厳格化が例として挙げられ、それに伴った低学年や卒業試験での留年者の増加がそれを物語っている。なかには、国家試験の受験者数が出願者数の半分以下の大学や、国家試験は受けさせないが、卒業だけを認める三次試験を行った大学もあるほどである。大学によっては、その年の国家試験出願者数のうち、国家試験合格にまで至ることができるのは10～20%というところもある。

あくまで表1における合格率は受験者数に対する合格率であるため、出願者数に対する合格率でみると、その数値はさらに低下する（歯科医師国家試験の出願自体は卒業試験前の11月頃に行われる）。

第109回歯科医師国家試験、私立大学における出願者数に対する合格者数を表2に示す。

今後の流れ

歯科医師過剰が叫ばれて久しい。この状態を考慮すると、現在約60%である歯科医師国家試験の合格率は、数年後さらなる低下が

表② 私立大学における第109回歯科医師国家試験の出願者数と受験者数、合格者数（新卒）

	出願者数	受験者数	合格者数
東京歯科大学	147	127	120
昭和大学	100	97	77
日本大学	130	113	85
日本歯科大学	130	96	81
愛知学院大学	143	112	85
日本歯科大学新潟	59	47	35
大阪歯科大学	106	73	57
神奈川歯科大学	127	67	55
日本大学松戸歯学部	109	73	43
福岡歯科大学	100	85	38
松本歯科大学	81	37	30
朝日大学	132	77	46
岩手医科大学	83	48	26
北海道医療大学	81	51	25
明海大学	145	81	44
奥羽大学	71	49	21
鶴見大学	145	98	39

予想される。また、新たな出題基準において合格基準の追加や引き上げが行われることも否定できない。

それに伴い、大学側もより「歯科医師国家試験合格の可能性が高い学生のみを進級・卒業させる、すなわち出口を絞る」方向へとシフトしていくと考えられる。

つまり、今後待っているのは進級・卒業のさらなる難化であり、それは低学年からの留年者や卒業時の留年者のさらなる増加に繋がると予測される。前述した三次試験を行う大学もこれからより増えていくと思われる。

また、歯科医療は年々進化しており、関係法規も変更され得る。国家試験にもその進化や変更が反映される。したがって、留年・国家試験浪人となってしまった場合、大学で自分が学習していた内容だけでは年を追うごとに太刀打ちできなくなる、といった事態が生じる可能性がある。実際、歯科医師国家試験では、多浪するごとに合格率が低下するとい

うデータが出ている。

そのため、自分が学習した内容に加えて、進化に対応した「知識のアップデート」が必要となってくるであろう。

今後の展望・取り組み方

かつて先輩より言われていたであろう「過去問さえやっておけば、試験は合格できる」という時代は、進級・卒業試験に関しても、国家試験に関してもすでに変化を遂げている。

いまや、歯科医師国家試験は本当の意味の「国家試験」へと変貌を遂げた。各大学も歯科医師国家試験に対応したカリキュラムの作成や、歯科医師国家試験に合格できる学生のみを選抜していくという流れが今後も進むと考えられている。

当然、学生の側にも、歯科業界、歯科医師国家試験のさらなる進化に対し、低学年の時点より目先の定期試験対策はいうまでもなく、将来のCBT(Computer Based Testing)や国家試験を見据えたしっかりとした学習習慣の確立が求められる。

各大学側も、歯科医師国家試験に対応できるカリキュラムの構築とともに、学習に不安のある学生フォロー、予備校などの提携など、出口を突破できる学生を一人でも増やせるような対策を、同時に構築すべきと考える。

本稿により、歯科医師国家試験の新潮流に対し、学生・大学・予備校がともに全力で対応できる環境を構築する一助になることを期待してやまない。

【執筆協力】

岩脇清一（東京デンタルスクール／歯科医師）